

母親から「年上の恋人」へ

——ヘミングウェイとオーク・パーク、パリ、そして酒——

田中紀子

1937年5月末、一人のアメリカ青年がアブサンを飲む。すると「この月の今頃花を咲かせる栗の木、外の大通りをゆっくり走る体の大きな馬、本屋、売店、画廊、モンソーリ公園、闘牛場、ショーモンの丘、保証信託会社、シテ島、フォワイヨの古いホテル¹⁾」が彼の心に浮かび上がる。彼の名前はロバート・ジョーダン、ヘミングウェイの小説『誰がために鐘は鳴る』の主人公である。ジョーダンは共和主義を支持し、スペインの内乱に人民戦線軍の一員として参加している。彼の橋梁爆破作戦に協力するゲリラ達の拠点である山中の洞窟に着いた夜、携帯していた水筒に残り少なくなったアブサンを飲むと、たちまちパリの様々な場所が回想されるわけなのだが、この場面を奇妙に思うのは私だけだろうか。

ジョーダンのアメリカでの職業は大学のスペイン語講師である。スペイン滞在の経験があつて、愛するスペインの街並に思いを馳せるといふのならわかる。実際、彼は作戦を完遂させたらマドリッドでしばらく休暇を過ごしたいと思つていたのであり、「マドリッドでは何冊かの本を買ひ、ホテル・フロリダへ行き、部屋をとつて熱い風呂に入りたかつた。給仕のルイスを行かせて、マンテケリアス・レオネサスか、グラン・ヴィアをそれた所にある店でアブサンを見つけられたら一壘買ってこさせ、風呂のあとベッドに横になって本を読み、二杯ほどアブサンを飲み、それからゲイロードに電話をかけて食事をしに行つてもよいか尋ねてみるつもりだ²⁾」という箇所はすんなり理解できる。しかし、彼が過去にパリに滞在した経緯については全く語られない。それにアブサンなる酒であるが、この酒は19世紀末にもはやされていたものの、中毒症状を引き起こすためフランスでは1915年以降製造販売が禁止されていてジョーダンに飲めたはずがなく、アブサンの味がパリと結びつくといふのはどうも解せない。先程の場面はこの作品に本当に必要なのかという疑問をもつてしまう。

パリに並々ならぬ思い入れをもつていたのはジョーダンというより、むしろ作者ヘミングウェイであろう。先程のパリの幾つかの場所のうち、保証信託会社はヘミングウェイがパリに着いてしばらくの間郵便物の宛先として用いており、また金に困つていた

1926年には友人がヘミングウェイの名義でここに400ドル預金してくれた思い出の場所である。また酒について言うと、ペルノーという酒が『日はまた昇る』に何度も登場するが、これこそがパリで飲むことができ、味がアブサンに非常によく似ている酒なのである。このペルノーとパリへのヘミングウェイの愛情が、アブサンを飲むジョーダンの心の中に思わずほとばしり出たと考えられる。このようにヘミングウェイがこよなく愛したパリと、彼が一度も作品に描かなかった故郷オーク・パークとを、酒という観点を折り込みながら作家の中でどのような位置を占めていたかを考えなおしてみたい。

I. オーク・パーク

イリノイ州シカゴ郊外のオーク・パークでヘミングウェイが生まれたのは1899年7月21日であった。当時のアメリカ社会を概観してみると、1893年から97年までの不況の後、共和党のマッキンレー政権のもと再び繁栄を取り戻していた。1901年セオドア・ローズヴェルトが大統領になると政治、経済面の規制が推し進められ、種々の改革が行なわれていった。大量生産が進み、交通網が整備され、電話、電気、新聞、雑誌などが普及し、消費社会、大衆社会へと移行しつつあった。従来の道徳観が揺るぎ始め、女性や人種、公教育などに対して新しい考え方が沸き上がってきた。個人所得が上昇し、余暇時間が増加して、スポーツ、特に野球が盛んになり、演劇、ボードビル、ミュージカルへの関心は20世紀に入ると映画に移り、音楽ではジャズが隆盛を極めるようになる。これらの生活の変化、価値観の変化は都市にまず明白に現われ、進歩、発展の陰には犯罪、腐敗も生じる。オーク・パークから東にほんの約14キロに位置するシカゴは、1890年に1,099,850人というアメリカで2番目に多い人口を抱えている大都市であった。英国の作家ラディヤード・キプリングは、西海岸カリフォルニアから東へとアメリカを旅しその印象記を1899年に出しているが、色彩と美の欠如した落ち着きのないシカゴにはうんざりしたようである。彼はこの都市を「神不在のシカゴ³⁾」と称し、「都市一本物の都市一に着いた。人々はここをシカゴと呼ぶ。他の土地など及びもつかない」、そして「もう二度と目にしたくはない。野蛮人たちの住みかだ⁴⁾。」と言いつつ放っている。シカゴはさらに発展を続け、十数年後の1914年に『ポエトリー』誌に掲載されたカール・サンドバーグの詩「シカゴ」には「がみがみ吠鳴る、ガラガラ声の、喧嘩早いでっかい肩の都市⁵⁾」とうたわれ、殺人、売春、飢餓、騒音、煤煙の渦巻く様子が描かれている。人口の4分の3が海外からの移民またはその子供であり、1916年に出された同じ詩人による『シカゴ詩集』の中にもユダヤ人の魚売り、アコーディオンを弾くハンガリー人の一団、安賃金で働くイタリー系移民の工夫、酒場を営むドイツ人、黒人、ロシア系ユダヤ人のバイオリン弾きの姿を見ることができる。そして1920年から禁酒法時代になるとアル・カポネが暗黒

社会を牛耳り、密売酒、もぐり酒場が急増してゆくのである。

ヘミングウェイの両親が育ち結婚後も住み続けたオーク・パークの人口は1900年には9,353人で、その構成員はアングロサクソンのプロテスタントであり、中流階級に属し、裕福な実業家、セールスマン、医者、歯科医が多く、共和党を支持し、宗教と教育に熱心だという特色があった。オーク・パークの住民はシカゴに通勤する者が大多数であったが、シカゴとは異なりシカゴに毒されない地域社会に居住していることに誇りを抱いていた。この町の第一会衆派教会の牧師ウィリアム・バートンの言葉にあるように、「酒場が終わり、教会の尖塔が始まる所⁶⁾」がオーク・パークで、およそ酒とは無縁であり、アメリカでの禁酒法施行よりはるか以前、1870年代から酒の販売は禁止されていた。キリスト教婦人禁酒同盟もオーク・パークで活動もよく行ない、酒の他に、ギャンブル、売春、ボクシングの試合、検閲されていない映画もシャットアウトされていた。安息日を守り子女の道徳的墮落を防ぐため、日曜日の映画上映は1932年になるまで禁じられていた。雑多な人種、犯罪、汚染のはびこるシカゴとの合併に対してオーク・パークの住民は拒否の姿勢を崩さず、厳格にしてお上品な共同体を維持し続けたのである。

ヘミングウェイの父方の祖父アンソン・ヘミングウェイは祖先からピューリタンの気質を多く引き継ぎ、信心深く生真面目で勤勉を第一とし、社交ダンス、トランプ、ギャンブル、酒は避けるべきものとみなし、積極的に禁酒運動に関わってもいた。母方の祖父アーネスト・ホールは英国生まれでヴィクトリア朝紳士的な風貌をし、アンソンよりは文化的なゆとりがあったが、やはり信仰心は厚く、家人を集めて週に6日間礼拝を取り仕切っていた。そしてこれらの父親の影響を多大に受けた息子と娘が結婚する。アンソンの長男クラレンス・エドモンズは医者で、謹厳実直な堅苦しさはまさに父親譲りであった。アーネスト・ホールの娘グレイスはオペラ歌手の道は断念したものの自宅で声楽の教師を続け、エドよりはるかに人生を楽しもうとする姿勢であり、トランプとダンスには寛容であった。このように対照的な夫婦ではあったが、どちらも敬虔なクリスチャンで日曜日の教会通いは欠かさず、清潔と秩序を重要視し、子供に果たすべき義務を教えこみ厳しい規律のもとに育てようという点では共通していた。2人とも酒と煙草は罪悪だと信じ、グレイスはキリスト教婦人禁酒同盟の会合の席で歌をソロで披露したこともあった。短絡的、楽観的に仮定すると、こういう両親とオーク・パークでの教育を受けて育ちつつある子供ならば酒に近づくこともなく、成人してシカゴのような都市に出ていったとしても禁酒法下で違法酒に浸る可能性は極めて少ないだろうということになるが……。

エドとグレイスのもとに、姉マーセリーンの次に長男としてアーネスト・ヘミングウェイは誕生した。全部で6人の子供を産んだグレイスは、それぞれの子供の成長記録を丹念につけており、「(アーネストは) ママと一緒に寝るのが嬉しくて、夜も頻繁に母乳

母親から「年上の恋人」へ——ヘミングウェイとオーク・パーク、パリ、そして酒——

を飲む⁷⁾」と書き残している。家事は極力せず汚れたおむつを嫌ったグレイスではあったが、アーネストへの愛情は世の母親に優るとも劣らず、夫は自分と同じように医者⁸⁾の職業に就かせたいと願っていたが、グレイスは芸術への感覚も磨こうと熱心に教育した。しかし、息子には精神的にも母乳を卒業し、親が調合する飲み物には飽き足らず、他の飲み物に関心が向く時が来る。親が良しとする生き方ではなく、自分なりの道を模索しながら背伸びして大人ぶってみたい年ごろに、酒を味わってみたいという気になるのは自然であろう。ヘミングウェイ自身の言葉によると「14になるやらずで酒を覚えた⁸⁾」とか「15歳の時から酒を飲んでいた⁹⁾」とあり、誇張や虚言の多かった彼のことゆえあまり信用できないが、彼にとって最初の酒は単なる好奇心のみならず、酒を飲まない両親に対する優越感や、道徳的に立派であるが偽善⁹⁾のにおいがする禁酒の町オーク・パークに対する反抗心の現われだったとも思われる。

彼の反抗心は父親よりも母親の方に多く向けられ、何人ものヘミングウェイの伝記作家が異口同音に述べているのは、ヘミングウェイの心の中では父親と母親は全く別の世界に属する存在であったということである。父親はしつけには厳しく体罰も辞さなかったが、オーク・パークを離れたミシガン州北部の自然が彼の本領発揮の世界であり、その中で息子に手ほどきを施した釣り¹⁰⁾と狩猟は、ヘミングウェイにとっては単なる気晴しをはるかに越えて、一生を通じて追求し作品にも大いに取り入れることとなった。ヘミングウェイ自身の幼少時代と重なる部分の多いニック・アダムズを主人公とした一連の作品には父親と酒をくみかわす場面は当然無く、むしろ友人とウィスキーを飲みながら「損していることがたくさんあるんだよ」と、酒を飲まない父親を憐れんでいるようなセリフが見られる。だが、釣り¹⁰⁾と狩猟についての父親への深い感謝の念は短篇「父と子」のニックの口を借りてはっきりと書かれているし、ニック以外の多くの作品の中にも、父親との言葉のやりとりや心の交流は多少の脚色はされても、その本質は変わらず描き出されている。

母親との間に修復できない亀裂が入ってしまうのは1920年の誕生日直後であるが、それまでにヘミングウェイはオーク・パーク以外の場所で、故郷とは異なる生活を経験している。そこは酒なくしては存在しないような人々の活躍する世界で、ヘミングウェイも両親の監視の目もなく気楽に酒を口にすることができた。大学進学を拒み18歳にして新聞記者の仕事に飛びこみ、ミズーリ州キャンザス・シティーで過ごしたのは7ヵ月。ライオネル・モイズというやり手の先輩記者がいて、その仕事ぶり、女性との派手な付き合いと飲む酒の量の多さに大人の男としての憧れを抱いたはずである。そのあと矢も楯もたまらず第一次大戦のイタリア戦線に赴いた際には「生まれて初めて、飲みたいだけのワインを飲み¹¹⁾」、負傷して病院に入れられても絶えずコニャックを隠し飲みするほどであった。イタリアに滞在したのも七ヵ月程度であった。自宅に戻ったヘミングウェイ

イは戦争のヒーロー、大人としての兄貴の貫禄を示すためもあってか、特に可愛がっていた妹のマデレーンにイタリアから持ち帰ったりキユールをこっそり飲ませている。姉のマセリーンに味わわせようとした時には、オーク・パークの住民は半分しか生きてい¹²⁾ず、「イタリア人は底の底まで生きている」と言っている。不眠不休に近い状態に取り組むやりがいのある仕事の場、人々が生を満喫していると思え、自らも最初の真剣な恋愛を知ったイタリア、また死と隣り合わせの戦場では酒は必須の飲み物であり、彼にとってもなくてはならない物となっていた。

ヘミングウェイの人生のスケールを拡大する一助となった酒は、一方で母親との決裂をもたらす一因ともなったと言えよう。同じ年齢のオーク・パークの青年に比べると華々しい活躍はあったものの、母親の目には無神経、無責任で大人になりきれない自分勝手な子供としか映らなかったようである。アングロサクソン・プロテスタント社会のオーク・パークの自宅にイタリア人の友人を招いて夜に酒を飲んで一緒に大声で歌ったこともある。5ヵ月間トロントに行って仕事をするが、帰宅するとまともな就職をせずアジアへ渡ってみたいと言い出したり、下品な言葉を吐き散らしたり、頼まれた雑用はしないし、挙げ句の果てに妹2人と友達と共に夜中に抜け出して騒ぐなどが重なり、ついに母親は考えと言動を改めるまでは家への立入禁止を言い渡す。また口先だけでなく息子への叱責を文面に書き連ねて手渡しもした。言葉を生活の糧として用い始めていて、一つ一つの語の意味にも響きにも特に敏感なヘミングウェイである。自分が母親に発したののしりの言葉を反省することはせず、母親が手紙の中で用いた「愛」、「神様」、「祈り」という語の陰に母親の自己満足や傲慢さのみを読み取って、恨みを募らせたと思われる。言葉には言葉で仕返しをとという気持ちからか、5年後発表した作品「兵士の故郷」には帰還兵クレブスが「神の王国」、「祈り」、「愛」などの言葉を繰り返す母親に「当惑と憤りを覚え」、「私はあなたの母親なの、小さい赤ん坊だったあなたを私の胸に抱きしめたのよ」と言われてクレブズは「気分が悪くなり、かすかに吐き気を感じた¹³⁾」とまで書かれている。

ヘミングウェイの作品における母親の扱いは異様なほど少なく、また登場した時には不気味でさえある。彼の生前に発表されたニック・アダムズの短篇16のうち母親が扱われているのは2篇だけである。「身を横たえて」のニックが第一次大戦中のイタリアで夜眠れないままに思い出す母親は、夫が少年時代に集めていた物を不要だとみなして庭で燃やし微笑んでいた姿である。多くの兵士たちが思い出すような、自分の身の回りの世話をしてくれたり、辛い時に微笑みかけてくれたような母親ではない。「医師とその妻」では母親は昼間ブラインドを下ろした部屋に横になったままで、家に戻った夫に説教を始める。2人は顔を見合わせることもすらない。ニックは母親が呼んでいると父親から伝えられても、それには従わず父親と一緒に森の中へと入って行く。「十人のインディアン」

母親から「年上の恋人」へ——ヘミングウェイとオーク・パーク、パリ、そして酒——

においては、ニックの夕食の支度をしてやり話の相手になってやるのは父親であって、母親の姿は無いし、話題にも上らない。以前昼日中から寝ていた母親は病弱であって、それからほどなくしてニックは父子家庭となったのかという錯覚さえ起こしかねない。「父と子」のニックは38歳になっており、亡くなった父親にあれこれと思いをめぐらせているが、母親の思い出は一言も語られないままである。

ヘミングウェイは、母親との一件以後オーク・パークに長期滞在することは一切やめ、母親の宗教観、道徳観と等号で結ばれるオーク・パークについては一度も作品の中で触れることはなかった。オーク・パークの本質は、第一次大戦に参入し、禁酒法を制定させたアメリカの宗教観、道徳観に通じるとも考えられる。ウィルソン大統領が1917年12月4日に議会で行なった演説から引用してみる。

これは高邁な公平無私なる主義の戦争であり、世界の自由な諸国民が正義のために結束しているのである。すなわち我々の国家、そして我々が尊き信条となしてきたものを存続させるための戦争であって、その終結に向けて我々同胞と共に敵国にとっても公正かつ完璧なる心構えを示す必要を感じているのである。¹⁴⁾

ここに使われたような美辞麗句により青年たちは戦場へと送りこまれたのであった。禁酒は、ヘミングウェイの母もその運動に参加した婦人キリスト教禁酒同盟と反酒場同盟により盛んに進められていたが、前者の規約の冒頭は次のようである。

過度の飲酒によって生み出される悪徳を認識し、その傾向と危険性に脅威を覚える私たちが合衆国の女性は、神の摂理のもと、飲酒を追放するために女性による努力を一つに結集することを自らの義務と考えます。¹⁵⁾

いずれの言葉も結局は幻滅しか生じない偽善的で理想主義的であり、ヘミングウェイはこれらに自分の母親に通じるものを嗅ぎとったのではないだろうか。彼と同時代の作家でやはり同じように第一次大戦でヨーロッパに赴いたマルカム・カウリーが述べた感想に「私たち自身の国は、国自身と私たち自体を分離させる法案を發布するかのよう¹⁶⁾に、禁酒法のための憲法修正案を通過させ、もはや私たち自身の国ではなくなっていた」とある。同様に、ヘミングウェイにとっても実母、故郷の町そしてアメリカは彼の望むような意味ではぐくみ、理解し、受け入れてくれる「母親」ではなくなったのである。

II. パリ

ヘミングウェイがパリに新婚の妻を伴って渡ったのは1921年12月。母親との心のつながりが断たれた翌年であり、禁酒法がアメリカで実施された翌年でもある。彼は以前第一次大戦中イタリアに向う前ほんの数日間パリで砲弾の降る中車を走らせたことがあったが、彼が本当にこの街を知るようになったのはこの2度めの滞在においてである。

フランスは1890年代から第一次大戦までは労働運動が活発化したもののおおむね平和で経済は発展し、「ベル・エポック」(良き時代)と称された。戦後の1920年代には一転して「レ・ザンネ・フォル」(狂騒の時代)という呼称が付けられる。1920年5月、時の大統領であったポール・デシャネルがパジャマ姿のまま誤って列車から転落するという事故が起きた。その後も神経を病み奇行を重ねて9月には政界から退くのだが、ウィリアム・ワイザーはこの大統領こそが身をもって狂騒の時代の先駆者たることを示したのだと述べている。¹⁷⁾ 政争が繰り返され政府の平均寿命は約8ヵ月と不安定で、¹⁸⁾ 経済的にはインフレが続きフランは値下がりした。しかし科学技術の進展により飛行機を含め交通・通信機関が発達した。ヘミングウェイがやって来た1921年はちょうどエッフェル塔からラジオ放送が始まった年であった。価値観が変化し、異なった思潮が出現し、新しい芸術が次々と誕生し、その「都」は何といてもパリであった。

パリはありとあらゆる点においてオーク・パークの対極に位置するような所であった。人口は、1870年の約100万が1931年にはおよそ500万に急増し、その半数以上がシテ島から半径9マイル以内の「シティ」に居住していた。大半がローマ・カトリック教を信仰しているが、ミサに足繁く通う人は非常に少なく、上流から貧困者まであらゆる階層の人々から成り、人種、国籍も様々であった。1928年からパリで極貧生活を体験したイギリス人ジョージ・オーウェルの『パリ・ロンドン放浪記』には、ポーランド人、アラブ人、イタリア人、ブルガリア人、ロシア人、ユダヤ人などとスラム街で過ごした約1年半が描かれている。黒人と白人の恋人たちが街中でデートをするのも珍しくなかった。文学、絵画、ダンスなどの世界ではフランス人以外に外国人も活躍がめざましく、ジョイスはアイルランド、モジリアニはイタリア、ディアギレフはロシア、ピカソはスペイン、そしてスタイン、パウンドはアメリカを出身地としてヘミングウェイより先にパリで暮らしていた。1925年になると黒人で名を馳せるアメリカ人女性ダンサーのジョセフィン・ベーカーが登場した。とにかくパリは新奇なものに対して拒否反応に見せず、演劇、音楽、ファッションの分野においてもどんどん目新しいものが生み出されていった。大都市という点ではオーク・パークに近いシカゴも同じであるが、急成長し人間性を損なう危険を孕むがさつで落ち着かないシカゴとは違い、パリには古い歴史が背景にあり、新と旧、動と静が共存するという魅力があった。

パリのアメリカ人について、彼らは「生粋のボヘミアンであった。大西洋の反対側で、まわりの社会や文化の絆から解放され、生活を自己発展に捧げ、伝統や慣習に囚われずに行動して、都会の娯楽に参加することができ、日常的なアイデンティティを、それに伴う規制とともに脱ぎ捨てることで、自由になった空想的生活に飛び込めるのである¹⁹⁾」とその特徴を的確にまとめたのはジェロルド・シーゲルであるが、ヘミングウェイも生まれ育った町では許されないことをどんどん行なった。日曜ごとに教会へ行くことはせ

母親から「年上の恋人」へ——ヘミングウェイとオーク・パーク、パリ、そして酒——

ずに、オートウエやアンギャン、ロンシャン、シャンティ、トランブレ、サン・クルー、バガテルの競馬場へよく出かけたし、ボクシング観戦もし、暗く狭いバル・ミュゼット（ダンスホール）で水夫や労働者に混じって踊りもした。ルーブルやリュクサンブルなどの美術館へ気軽に徒歩で出かけ、文学においては先輩格の作家たちと知り合えるということもオーク・パークでは不可能であった。

そして何よりもパリの街には常に酒があった。何しろフランスは世界最大の酒の消費量を誇る国である。1人当たり毎日900ミリリットル以上のワインを飲んでいる計算になるという数字もある²⁰⁾。酒が生活に溶け込んでいる国民にとっては「高尚な実験」と呼ばれたアメリカでの禁酒法など想像だにできなかったはずである。カフェはセーヌ河左岸、右岸両方に点在し、その数は19世紀末には約3,000軒にもものぼっていた²¹⁾。健全なる市民の目には容易に触れないアメリカのもぐり酒場とは異なり、早朝7時頃から翌朝2時頃まで営業する所も多く、店内のみならず通りに向っても堂々とテーブルを並べ、客は歩く人を眺めながら、また眺められながら酒を楽しむのであった。カフェは単に飲み食いの場であっただけでなく、17世紀末からは哲学者や作家が集って議論を交わし文化を熟成させる場として重要な役割を果たしていた。1920年代には特に左岸のモンパルナス周辺が文芸活動の盛んな地域で、特にセレクトというカフェは1925年に開店し、ガートルード・スタイン、エズラ・パウンド、ドス・パソス、マルカム・カウリー、スコット・フィッツジェラルド、そしてヘミングウェイら「失われた世代」の作家たちの根拠地になったとされている。このすぐ近くにはドーム、ロトンド、またヘミングウェイがことのほか気に入り、「パリの中でも最上のカフェの一つ²²⁾」との評価を下したクロズリー・デリラというカフェもあり、彼らはこれらの店を『トロント・スター』紙に送った記事や小説、詩の中に取り入れていった。彼よりはるかに貧しい暮らしを強いられたオーウェルも友人のロシア人にとって「ひいきのカフェはモンパルナスにあるクロズリー・デリラ²³⁾だった」と思い出しているのは面白い。ヘミングウェイの場合、朝カフェへ出かけてカフェ・オ・レを飲みながら文章と格闘することも多かったが、「毎日午後にカフェへ行く²⁴⁾と知人がいる」と詩「モンパルナス」に書いているように昼からは酒を潤滑油として交遊を広げ、深めた。カフェの他にもホテルのバーやレストラン、ビールを飲みたければブラッセリー、ダンスも楽しみたければバル・ミュゼット、と酒を飲む場所には困ることはなかった。

酒が安く味わえるのもヘミングウェイには喜ばしいことであった。パリに着いた1921年には1ドルが12フラン、到着した日の夕食が2人分でたった12フラン、上質のワインが1壺60サンチームであった²⁵⁾。1925年になると公定為替レートは1ドルが21.25フランとなり²⁶⁾、0.5リットルのビールが5セント、家具付きアパート1ヵ月の家賃が40ドルに相当した²⁷⁾。生活費を安く上げられることが一因となり、1927年には合衆国商工会議所の数字

によると約15,000人、パリ警察の調べでは35,000人のアメリカ人がパリに住みついでいた。²⁸⁾ 英語の書籍を主に扱っていたシェークスピア書店でよく売れた本にウィリアム・バード著の『フランスのワイン』(1924)があったことからも、²⁹⁾ いかにか大挙してパリへ押し寄せたアメリカ人が酒に親しんだかがわかる。

飲酒を責める両親とは違って、ヘミングウェイの妻ハドリーは強い酒が好きで、酒を飲むことに何の抵抗ももっていなかった。決して贅沢はできない2人だったが、酒はおいしく安いものを買って毎日飲んでいたのである。ジャネット・フラナーは2人のアパートに招かれた時には昼食はたいてい卵1個ずつとゆでたじゃが芋だけだが、ワインは欠かされることはなかった、と友人への手紙に書いている。³⁰⁾ 一緒に酒を楽しめる伴侶である以上に、ハドリーはヘミングウェイを理解し愛することに徹していた。結婚前からハドリーはヘミングウェイの勤勉ぶりを誉めたり、自信を持たせようと努めていたが、結婚後も明るく忠実に接するという態度は変わらず、夫の愚痴、憤りに耳を傾けて慰め、励ました。仕事が頭にあると朝から無口、昼間は執筆用に借りた部屋やカフェへ出かけてほとんど家にはいないし、全く自分のペースで生活していて友人とのもめ事も多い夫であったが、ハドリーの方から不満を言うことはほとんどなかったようである。8歳年上のハドリーは母親のグレイスが与えなかった無条件の愛情を注いだと言える。

ヘミングウェイは、ハドリーの他にも年上の女性にずいぶん支えられた。ヘミングウェイより12歳年上のシルヴィア・ビーチはシェークスピア書店の経営者であった。40年近くたっても「彼女ほど私によくしてくれた人はいなかった」と感謝の気持ちを持ち続けた。最初に会った時からヘミングウェイを信用し、どんどん本を貸し出してくれたばかりでなく、金銭面で助けてくれたこともあった。シルヴィアは酒を飲まなかったが、酒を飲む文人たちは嫌いではなく、彼らの集まりの場や自分の書店でヘミングウェイを他の作家に紹介した。ガートルード・スタインはこの時40代後半、グレイスとほぼ同年である。ヘミングウェイとハドリーがスタインを訪問した時にはスモモやキイチゴから蒸留して作ったリキュール、火酒で彼らをもてなした。彼女はヘミングウェイの書いた物に目を通し、文章表現について事細かな指導をただけでなく、ハドリーに髪の手切り方や金の使い方など生活面でのアドバイスも行なった。当初ヘミングウェイは、自分たちを「とても善良で、お行儀のよい子供であるかのように対応する」³²⁾ スタインに謙虚な感謝の態度を示していたが、説教されたり自分の弱点を指摘されることを嫌うのがヘミングウェイである。体格的にもグレイスに似るこの文学上の「母親」を次第にうっとうしく思うようになったのは不思議ではない。シルヴィアもスタインも同性愛者であったのに、スタインだけに対して抱いた反感を、同性愛の相手との意味ありげな言葉のやりとりを作品の中に取り入れるという意地悪なやり方で解消したのであった。その他にも、『日はまた昇る』で主人公を翻弄する女性のモデルとなり、ヘミングウェイが一時恋心を

抱いたダフ・トワイズデンも、彼の2番目の妻になるポーリーン・プファイファーも酒をたしなみ、それぞれ彼よりも7歳と4歳年上であった。ヘミングウェイのパリ時代は、パウンド、ジョイス、フィッツジェラルドなどの男性作家からもアドバイスをふんだんに受けて作家修業に励みながら、内面では母親的女性たちに貪欲に愛情を求めた時期だと言えよう。

次にパリとヘミングウェイの作品について整理してみよう。彼の長編作品の中でパリを大々的に舞台としたのは『日はまた昇る』と『移動祝祭日』のみであるが、多くの長編そして短篇小説の中にもパリが顔を覗かせる。そのうち最も早く日の目を見た作品は「ぼくの親父」で、1922年夏に書かれ、その翌年ヘミングウェイが最初に世に出した『3つの短篇と10の詩』に入れられた。ミラノからパリへ仕事の間を移す競馬の騎手である父親との生活が息子の視点から語られている。息子が幼い目でパリを初めて見た感想は「パリはおそろしく大きな都会だ。ミラノでは誰もがどこかに向かって進んでいて、電車も目的地へと走っていて、ごっちゃになることはない。でもパリでは何もかもが一緒くたで整理されることなどない³³⁾」と述べられているが、これはそのままヘミングウェイが1921年12月にもった印象であろう。『トロント・スター・ウィークリー』紙への記事にあるようにカフェ・ロトンドにたむろする芸術家気取りたちを冷ややかに観察することができ、「全パリは私のものだ³⁴⁾」という余裕のある気分になれるまでには日数がかかったはずである。この短篇の父親は、パリに暮らすようになってからはカフェで過ごす時間がふえ、「それまでにはぼくが見たこともないほど（ウィスキーを）飲み³⁵⁾」、最後には八百長を仕組んだと思われるレースで死亡する。父親は真摯にレースに臨んだと信じていた息子は競馬も含めて「何もかもが一緒くた」のパリの中に息子はとり残される。ヘミングウェイは友人やパリでの生活を勧めたシャーウッド・アンダーソンに物価の安さをひたすら喜ぶ手紙を出したが、その一方で種々雑多なものが混在するこの「おそろしく大きな都会」にいくばくかの不安を感じていて、それがこの作品に現われたと考えられる。彼はまた、この短篇の中に自分の両親への思いを投影させている。父親は汗をかきながら一緒にランニングをしている最中に「ぼく」ににっこりと笑いかけたり、女の子のことで「ぼく」をからかったり、馬の話をしたり昔の体験を語ってくれたりする。父親といるのが「楽しかった」、父親が「誇らしかった」、父親が「本当に好きだった」と何度も繰り返されて息子の愛情が強調されている。これに比べると母親の扱いはあまりにもそっけなく残酷である。父親が聞かせてくれる思い出話の一つが「母親が亡くなる前にサン・モリッツの氷上を馬で駆けた³⁶⁾」こととなっていて、母親という言葉はこの1ヵ所にしか見られない。結婚し仕事を心得、オーク・パークからかなりの距離を隔てたパリで独立した生活を送っていたはずなのだが、両親への思いを引きずって、この作品

によって父親への共感をいま一度確認し、母親への鬱積する不満を一種の母親殺しの形で一時的にせよ晴らしたのであろう。

ヘミングウェイの最初の長編小説『春の奔流』(1926)にもパリの謎めいた複雑さは示されている。アメリカのミシガン州ペトスキーの安食堂に勤める年増のウェイトレスはイギリス生まれで、パリ万博(1900年と思われる)に母親と行ったのだが、ホテルに泊まった翌朝母親は影も形もなく、見知らぬフランス人将校が母親のベッドにいたという奇妙な経験をしている。その真相は彼女には不明のままであるが、読者には小説の終わりの「作者からのお知らせ」において、実は母親は腺ペストに感染し、万博開催時に歓迎されざるこの事態をひた隠しにするべくフランス当局が仕組んだのであった、と説明される。

一方ポンプ工場の労働者として登場するヨギ・ジョンソンにとって気懸かりなのは、女性に対する欲望がこの何年も全く起きないことで、生きる気力もなくしているのだが、その原因が彼の口から明らかにされるのも最終章においてである。第一次大戦中休暇でパリに行った時、男女の性行為を隙間から覗かせるという観光客のための秘密のショーとは知らずに相手役の男性をつとめたためであった。「生涯で一番幸福であるはずだった二週間³⁷⁾が大いなる幻滅に終わったのである。「ああ、パリ。パリまでは何と遠いのだろう。朝のパリ。夕方のパリ。夜のパリ。それからまた朝のパリ。多分昼のパリも³⁸⁾」と明白にスタインを思わせるヨギの繰り返しは、決してパリをなつかしむ言葉ではなかったのである。ある夜、安食堂に全裸にモカシンという格好で赤ん坊をおぶって入ってきたインディアン³⁹⁾の妻を見た瞬間、彼は失っていた感情をすっかり取り戻す。そして服を次々と脱ぎ捨てながら、春の訪れを告げる暖かい風の中を、そのインディアンの女性と一緒に町から北へ、自然へと歩いて行く。

ヘミングウェイが揶揄したアンダーソンの『黒い笑い』の中では大都市シカゴとパリが誤った結婚をスタートさせる場となっている。黒人が自然に近い存在として描かれ、「窮極³⁹⁾の真理に到達する方法を有している」黒人の歌声に促されるように最後には本能的に引き合った男女が新たな人生を踏み出すのである。『春の奔流』ではパリはウェイトレスの母子関係を断ち切らせ、若い世代の性衝動と生命力を奪う場所として扱われていて結末は自然との合体なのだが、これで終われば都会は破壊、自然は再生というアンダーソンと同じパターンになってしまう。ヘミングウェイは「作者から読者への註」を数カ所に挿入して、毎日午後には芸術論を交わすカフェ・ドームや、ドス・パソスやフィッツジェラルドらとの付き合いなど自らのパリの生活の一端を伝えている。ドス・パソスと共に飲んだ酒については、モントラシェ、シャンベルタン、オスピス・ド・ボーヌの名までが挙げられている。それぞれ白ワイン、最高級の赤ワイン、ブランデーの銘柄であって、酒への言及はむしろパリの楽しさを示す効果となっている。そしてアンダーソ

母親から「年上の恋人」へ——ヘミングウェイとオーク・パーク、パリ、そして酒——

的な都会と自然の対比は笑い飛ばされ、パリなる都会は文人にとっては多分に魅力的な所、前の世代の作家に反発して作品を生み出せる所として提示されているのである。

『春の奔流』では短期間パリを訪れた旅行者に起きた一風変わった出来事のみが取り上げられたのだが、パリを住みかとする外国人の日常生活と街並は次の作品『日はまた昇る』(1926)に生き生きと描き出された。この小説での酒の使い方は十分注目に値し、物語の進行との関わりについては別稿で取り上げた⁴⁰⁾。他にヘミングウェイがパリ滞在中に書いた作品でパリに触れているのは短篇の「贈り物のカナリア」(1927)と「エリオット夫妻」(1925)である。前者では、別居に踏みきる夫婦の乗った列車がパリに近づいていることはデュボネ、ペルノーといったいずれも酒の大きな広告が車窓に映ることで示される。後者では、10歳以上年の離れたアメリカ人夫婦が結婚後すぐにフランスへ渡る。詩人である夫と仲間が外国人で混みあうカフェ・ロトンドを避けてドームに集まった、というのはヘミングウェイの行動そのものである。「大学さえあれば、彼らの多くはモンペリエやペルピニャンに行きたかっただろう⁴¹⁾」とあるが、この2つの地名はワインやブランデーの産地であり、酒に明け暮れる彼らに対する酒好きなヘミングウェイの冗談である。子作りの行為に励みはしても精神的に不毛な生活を送るうちに、年上の妻は女友達とベッドを共にし、エリオット氏は白ワインを飲む習慣がつき夜は詩作に没頭するようになる。若い男性の同性愛者たちがダンスホールで遊ぶ様子は『日はまた昇る』に描かれ、また短編「海の変化」(1933)では、パリのあるカフェでレズビアン⁴²⁾の恋人ができたため夫に別居を告げる妻が見受けられる。多様性を許容するパリは飲酒ばかりでなく愛情の形にも寛容であり、同性愛者たちはアメリカとは比較にならないほど卑屈にならずに暮らしていた。パリはこの点においてもヘミングウェイの視野を広げ、創作のアイデアを与えたのであった。

パリ滞在は1928年までで、アメリカへ戻ってからのヘミングウェイは都会ではなく海の醍醐味を楽しめるキー・ウエスト、その次にはハバナを拠点として、釣り、狩猟、闘牛の本場へと活動的に出かけたが、パリは忘れられない思い出の場所として脳裏に焼き付いていた。サファリの実体験を描いた『アフリカの緑の丘』(1935)ではその自然を絶賛し、「ぼくはこの国を非常に愛し、それは本当に愛している女性と一緒にあったあのように幸せ⁴²⁾」であり、「ぼくは生涯この国を愛してきた」と書いているが、パリで2度目に住んだ部屋で「梨酒で命をつなぎ、安ワインと水ばかり飲んで⁴³⁾いた」つましい暮らしぶりを回顧する。「キリマンジャロの雪」(1936)でも死を前にした主人公を代弁者として「人生の良き時代に一番楽しかったのはアフリカだった⁴⁴⁾」と述べさせているが、自分がパリで最初に暮らした貧困と泥酔と喧騒の充満するコントレスカルプ広場界隈を「パリの⁴⁵⁾中でどこよりも愛している区域」と呼ばせている。

戦争の只中に身を置いている兵士が唐突にパリを思い出す場面が『誰がために鐘は鳴

る』にあることはすでに見た。短篇「人は知らず」でも若いニック・アダムズが第一次大戦中のイタリアで真っ白なパリのサクレール寺院を記憶に蘇らせている。スペインの内乱を題材としたヘミングウェイの唯一の戯曲『第五列』(1938)では、舞台となっている砲撃の続くマドリード市内のホテルで、女性記者が愛する男性に家庭を持ってパリのリュクサンブール公園で子供を遊ばせたいと言う。男性が吐き捨てるように言う行きたい場所としてパリのホテルや公園、競馬場などがあり、戦乱、破壊、轟音の中で求める平和、安寧、静謐の象徴としてパリは扱われている。

これらの作品から10年以上が経ってからの『河を渡って木立の中へ』(1950)は50歳の元アメリカ軍人キャントウェルの死を前にした物語であるが、その恋人である18歳のイタリア人の娘は、2人が今居るイタリアの「私たちの町の次にパリは世界で一番美しい都会だわ⁴⁶⁾」と言い、パリの話をしてほしいとせがむ。体を病みながらも強い酒を頻繁に飲むキャントウェルは、愛する者との永遠の別れを予感して「多くの戦闘の前、それから秋のある時期にはほとんど決まって、そしてパリを去る時にはいつもこんな感じがした⁴⁷⁾」と独り言をつぶやく。作者も作品の主人公も壮年から初老へと移る時期になっていて、過去の幸福と結びついてパリへの想いは寂寥感を帯びているのである。

同じ頃(1946~1958)断続的に執筆され、ヘミングウェイの死後出版された作品のうち『エデンの園』(1986)の舞台はフランスの田舎町とスペインで、パリは主人公の夫婦が初めて出会った場所であることが会話の中で語られる。作家である夫が自信のある短篇を完成させた時にビールを飲みながら楽しく思い出す所の一つがパリで、ついに精神に異常をきたす妻が夫のもとを去って向かうのもパリでなのだが、どちらも極めてざらりと述べられている。アフリカの獣道が交差している様子を「パリの地下鉄の路線図を思わせる⁴⁸⁾」と書いている程度で、愛着のあるパリのいくつかの場所を具体的に取り上げてはいない。だが、スク립ナー社の編集者トム・ジェンクスが削除してしまった原稿には、パリに住む別の夫婦が登場し、彼らの住むアパートはヘミングウェイが最初の妻ハドリーと住んだアパートとなっていて、1920年代のパリへのこだわりが相変わらずうかがえる。

ハドリーと別れて7年後、1934年にパリに戻った時には以前の友人はほとんどいず、目につく外国人はドイツ人ばかりで、ヘミングウェイはパリを心変わりしてほかに愛人をもっている女性に例えた。そして「私もまた別のものを今では愛している。もし戦うのなら、その別のもののために戦うのだ⁴⁹⁾」という文章を『エスクワイアー』紙上に載せている。だが第二次大戦になるとノルマンディーに上陸し、パリに着いた時の感傷を次のように述べている——「私は喉が妙に詰まって眼鏡を拭かねばならなかった。というのも今や眼下に私が世界で一番愛する都市が灰色に相変わらず美しく広がっていたためである⁵⁰⁾。」パリをドイツ軍から奪回した喜びは恋人を再び自らの腕の中に救出した喜びに

通じるように思われる。以前と変わりのない街であることを今更のように知り、足繁く通ったカフェの一つネーグル・ド・トゥルーズやビヤホール・リップを「解放」し、シルヴィア・ビーチとの感激的な再会を果たした1944年であったが、1933年頃からあったパリの思い出をまとめたいという願いが実現するのはもっとあとである。1956年にホテル・リッツで見つかった昔のトランクに入ったノートや原稿などが大きな引き金となって回想録の筆が進むことになったとされている。それが最終的に書き上げられたのは自殺する前年の1960年で、『移動祝祭日』(1964)として死後出版された。やはり死後に出された『海流の中の島々』(1970)はビミニとキューバが舞台であるが、主人公の画家と10代の長男がパリを思い出す場面にかかなりの頁数が当てられている。いずれの作品にもヘミングウェイがハドリーと住んだアパート、カフェのクロズリー・デ・リラ、リュクサンプール公園、セーヌ河の岸などが挙げられ、パウンド、ジョイス、フォード・M・フォードが実名で語られている。ワインその他の酒やパン、ポワローという青葱の味、競馬場やはしけが引かれて行く光景、無蓋馬車の走る音、落葉をたくにおい、鳩の手触りなど五感のすべてでパリを感じ取っていたことが読者に伝わってくる。1923年に『トロント・スター・ウィークリー』紙に送った記事には「何もかもが少しばかり美しすぎて見えた⁵¹⁾」と春のパリについて書いているが、のちになって真っ先に浮かぶのは秋のパリであったようだ。『海流の中の島々』では戦死することになる息子がパリの「秋を思い出すのが一番楽しい⁵²⁾」、「秋が大好きだったよ⁵³⁾」と繰り返す。『移動祝祭日』は冒頭から秋の描写である。活気と刺激に溢れた華やかなパリではなく、簡素で静かなアパートで過ごす冷たい雨の降る前の晩秋である。これらの秋は作者の人生における「秋」と呼応していて、全編にもの悲しさが漂っている。

『老人と海』(1952)に漁夫のサンチャゴ老人が海について考える次のような箇所がある。

海のことを考えるばあい、老人はいつもラ・マルということばを思いうかべた。それは、愛情をこめて海を呼ぶときに、この地方の人々が口にするスペイン語だった。海を愛するものも、ときにはそれを悪しきざまにののしることもある。が、そのときすら、海が女性であるという感じはかれらの語調から失われたためしがない。(中略)老人はいつも海を女性と考えていた。それは大きな恵みを、ときには与え、ときにはお預けにするなにものかだ。たとえ荒々しくふるまい、禍いをもたらすことがあったにしても、それは海みずからどうにもしようのないことじゃないか。月が海を支配しているんだ、それが人間の女たちを支配するように。老人はそう考えている⁵⁴⁾。

ヘミングウェイはキューバの海ばかりでなくミシガン州、モンタナ州、アイダホ州、

それにアフリカの自然も愛し、このサンチャゴと同様に自然には女性に対するような感情をもっていた。しかしそれらの自然の中では思いきり力強い「男らしさ」を見せ、攻撃性を発揮するのが主であって、パリに対する感情とは全く異なっていた。ヘミングウェイにとって最もいとしいパリは1921年から26年のパリで、2番目の妻ポーリンと住んだフェルー通りの家、3番目の妻マーサと訪れた1937年のパリ、4番目の妻メアリーと泊まったホテル・リッツなどは作品には取り入れられていない。ハドリーと共に暮らしたパリはまさにエデンの園であった。「私たちはたっぷり安く食べ、たっぷり安く飲み、たっぷり暖かく共に眠り、お互いを愛し合⁵⁵⁾った」という『移動祝祭日』の文章が当時の幸福感を伝えている。スイスへしばらく出かけようと提案する夫に「あなたも出かけることを考えるなんて素敵⁵⁶⁾ね」と妻も同調し、「私たち、ほかの人は絶対に好きにならないのよ。」「そう、絶対⁵⁷⁾だよ」と愛情を確かめあう日々であった。十数年後ポーリンとの結婚生活に亀裂が生じ始めると、ハドリーへの手紙に、2人でいた時が現世における天国⁵⁸⁾であったと書いている。過去はますます美化され、純粹に幸福であった一時期は、手放してしま⁵⁹⁾って取り戻すことのできない「大きな宝物」として懐かしさと悔恨の混じりあった感情でふり返られるのである。死後に残された長編の作品の中でもこの『移動祝祭日』⁶⁰⁾に関してはフィリップ・ヤングのように「約四十年前の最良の散文で書かれてい⁶⁰⁾る」と最も高い評価を与えるのが一般的である。晩年内臓を病み、精神的にもうつ状態という苦しい中で何とかこの作品を完成できたのにはパリへの追憶が少しでも治癒の効果をあげたからと考えられよう。

ヘミングウェイは自立した生活を送るようになってからは、オーク・パークには極力足を向けようとしなかった。彼にとっての故郷は高德で酒の飲めない町、若い頃自分を拒絶し、結局全面的に自分を認めようとはしないとしか思えない母親の町、「前代未聞、全米随一のあばずれ女⁶¹⁾」の母親グレースの町であった。それに対し、パリは多種類の酒をふんだんに楽しめる都会であり、ヘミングウェイがその生涯において回数を数えきれないほど想いを寄せた場所であって、母親が与えることのできなかつた愛情を埋め合わせてくれる年長の女性たち、とりわけ最初の妻ハドリーとしっかりと結びついていた。そしてアメリカよりもはるかに長い年月を重ねて奥行のある文化を築いてきたこのフランスの首都は、活力と喜び、慰め、作品の支柱と装飾をも恵んでくれたのであり、最後まで彼をいつでも無条件に受け入れてくれる心優しき年上の恋人であったのだ。

註

- 1) Ernest Hemingway, *For Whom the Bell Tolls* (New York: Charles Scribner's Sons, 1940) 51.
- 2) *Ibid.*, 228.
- 3) Rudyard Kipling, *From Sea to Sea: Letters of Travel & American Notes* (Doub-

- leday, Page & Company, 1923)448.
- 4) Rudyard Kipling, *From Sea to Sea: American Notes & City of Dreadful Night* (Doubleday, Page & Company, 1923)139.
 - 5) カール・サンドバーグ『シカゴ詩集』(安藤一郎訳)(岩波文庫、1957)15.
 - 6) Jeffrey Meyers, *Hemingway: A Biography* (New York: Harper & Row, 1985)4.
 - 7) Bernice Kert, *The Hemingway Women* (New York: W. W. Norton & Company, 1983) 27.
 - 8) Tom Dardis, *The Thirsty Muse* (New York: Ticknor & Fields, 1989)157.
 - 9) Carlos Baker, ed., *Ernest Hemingway: Selected Letters (1917-1961)* (Herts and London: Granada Publishing, 1981)420.
 - 10) Ernest Hemingway, *The Short Stories of Ernest Hemingway* (New York: Charles Scribner's Sons, 1966)120.
 - 11) Carlos Baker, *Ernest Hemingway: A Life Story* (Harmondsworth: Penguin Books, 1969)62.
 - 12) Ibid., 87.
 - 13) *The Short Stories of Ernest Hemingway*, 151-152.
 - 14) Christian Gauss, *Democracy Today: An American Interpretation* (Chicago: Scott, Foresman and Company, 1919)207.
 - 15) 岡本勝『アメリカ禁酒運動の軌跡』(ミネルヴァ書房、1994) 134.
 - 16) Malcolm Cowley, *Exile's Return* (Harmondsworth: Penguin Books, 1962)47.
 - 17) William Wiser, *The Crazy Years: Paris in the Twenties* (New York: G. K. Hall, 1983)9-12.
 - 18) 河野健二『フランス現代史』(山川出版社、1977)191.
 - 19) 海野弘『パリの手帖』(マガジンハウス、1996)66.
 - 20) 小泉武夫『酒の話』(講談社現代新書、1982)29.
 - 21) 渡辺淳『カフェ』(丸善ライブラリー、1995)103.
 - 22) Ernest Hemingway, *A Moveable Feast* (New York: Charles Scribner's Sons, 1964)81.
 - 23) George Orwell, *Down and Out in Paris and London* (London: Secker & Warburg, 1960)24.
 - 24) Ernest Hemingway, *Complete Poems* (Lincoln and London: University of Nebraska Press, 1979)50.
 - 25) *Hemingway: A Life Story*,126.
 - 26) ジャネット・フラナー『パリ・イエスタデイ』(宮脇俊文訳)(白水社、1997)40.
 - 27) Michael S. Reynolds, *The Sun Also Rises: A Student's Companion to the Novel* (Boston: G. K. Hall, 1988)80.
 - 28) Kenneth S. Lynn, *Hemingway* (New York: Simon and Schuster, 1987)149.
 - 29) ノエル・R・フィッチ『シルヴィア・ビーチと失われた世代』(上巻)(前野繁他訳)(開文堂、1986)350.
 - 30) Robert E. Gadjusek, *Hemingway's Paris* (New York: Charles Scribner's Sons, 1978) 55.
 - 31) *A Moveable Feast*, 35.
 - 32) Ibid., 14.
 - 33) *The Short Stories of Ernest Hemingway*, 195.
 - 34) *A Moveable Feast*, 6.
 - 35) *The Short Stories of Ernest Hemingway*, 201.

- 36) Ibid., 202.
- 37) Ernest Hemingway, *The Torrents of Spring* (New York : Charles Scribner's Sons, 1972) 5.
- 38) Ibid., 75.
- 39) Sherwood Anderson, *Dark Laughter* (New York : Grosset & Dunlap, 1925) 248.
- 40) 田中紀子「『日はまた昇る』における酒」、神戸常盤短期大学紀要第18号 (1996) 71-81.
- 41) *The Short Stories of Ernest Hemingway*, 163.
- 42) Ernest Hemingway, *Green Hills of Africa* (Charles Scribner's Sons, 1935) 73.
- 43) Ibid., 70.
- 44) *The Short Stories of Ernest Hemingway*, 59.
- 45) Ibid., 70.
- 46) Ernest Hemingway, *Across the River and Into the Trees* (New York : Charles Scribner's Son's 1950) 217.
- 47) Ibid., 254.
- 48) Ernest Hemingway, *The Garden of Eden* (New York : Charles Scribner's Sons, 1986) 182.
- 49) William White, ed., *Ernest Hemingway : By-Line* (New York : Charles Scribner's Sons, 1967) 158.
- 50) Ibid., 383.
- 51) Ibid., 90.
- 52) Ernest Hemingway, *Islands in the Stream* (New York : Charles Scribner's Sons, 1970) 64.
- 53) Ibid., 186.
- 54) Ernest Hemingway, *The Old Man and the Sea* (New York : Charles Scribner's Sons, 1952) 29-30.
- 55) *A Moveable Feast*, 51.
- 56) Ibid., 8.
- 57) Ibid., 38.
- 58) *Ernest Hemingway : Selected Letters (1917-1961)*, 518.
- 59) *A Moveable Feast*, 134.
- 60) Philip Young, *Ernest Hemingway : A Reconsideration* (University Park and London : The Pennsylvania State University Press, 1966) 279.
- 61) *Ernest Hemingway : A Life Story*, 708.